

「山の日」制定協議会

「山の日」をつくろう

わが国の国土は、7割近くが広い意味での山であり、その多くを森林が覆っています。古くから日本人は山を信仰の対象として崇め、森林の豊かな恵みに感謝し、自然とともに生きてきました。山の恩恵は渓谷の清流を生み、わが国を囲む海へと流れ、生きとし生けるものを育むだけではなく、豊かな心をも育んできました。わが国の文化は、「山の文化」と「海の文化」の融合によってその根幹が形成されてきたと言われています。

わたしたち山を愛する5つの山岳団体は、国民祝日としての「山の日」制定を提案します。「山の日」は、日々の生活と文化に結びついた山の恵みに感謝するとともに、美しく豊かな自然を守り、育て、次世代に引き継ぐことを国民のすべてが銘記する日です。この運動を通じてわたしたちは、登山者の安全と健康に寄与し、登山の楽しみを広く伝えたいと願います。すでに祝日となっている「海の日」と対をなして、日本に住むすべての人々が、山という自然を見つめなおし、深いかかわりを考える日にしたいと思います。

わたしたちの提案に賛同され、より多くの方々、団体より、ご理解とご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

「山の日」制定協議会
(社)日本山岳協会
日本勤労者山岳連盟
(社)日本山岳会
(社)日本山岳ガイド協会
HAT-J(日本ヒマヤン・アドベンチャー・トラスト)

* 「山の日」制定協議会は上記の山岳5団体により2010年4月発足した。

平成22年度の幹事は日本山岳会です。(担当=常務理事 成川隆顕)

* 上記アピールは〔山を考える / 「山の日」をつくろう〕のリーフレットに掲載した。

【解説】

「国際山岳年」と「山の日」

2002年は、国連の定めた「国際山岳年」だった。根拠は1992年の「地球サミット」採択された「アジェンダ21」。40章から成るその「アジェンダ」の「第13章」に「脆弱な生態系の管理・持続可能な山岳開発」とあり、1998年11月の第53回国連総会で、キルギスを始めとする130ヶ国の共同提案によって、この13章に基づいて2002年を「国際山岳年」とすることが決議された。

国連の呼びかけに応じて、世界の国々が国内委員会を発足させ、日本でも、2001年11月、田部井淳子氏を委員長に、日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会など登山組織の代表、日本地理学会、森林利用学会など学者グループなど山々を愛する人々が「国際山岳年日本委員会」を発足させた。（最終的に世界の78の国に委員会が誕生した）。

日本での活動は2002年1月31日、2月1日、国連大学で開かれた「パブリック・フォーラム 山と私たち」、国際シンポジウム「山岳生態系の保全」を皮切りに始まり、4月7日には東京・青山で開いた国際山岳年日本委員会主催フォーラム「我ら皆、山の民—私たちは、なぜ山にひかれるのか—日本の山をめぐる文化的挑戦—」が催された。

7月6、7日、静岡県富士宮市では「富士山エコ・フォーラム—富士山の自然を君たちへ」とのフォーラムを開催。1200人で埋まった会場には大木環境大臣（当時）も参加、ここで「日本に山の日を」と訴える「富士山からのメッセージ」が採択された。1週間後の7月12日から14日にかけて大雪山の麓で「国際山岳年・国際エコツーリズム年記念山岳エコツーリズム・フェスティバルin北海道2002」が開かれた。11月には大阪で朝日新聞社との共催で「山との出会い—百名山が問いかけるもの」と題してフォーラムを開いた。日本委員会特別顧問の梅棹忠夫氏が基調講演をした。

国際山岳年日本委員会は、2003年4月8日、東京・神宮前の国連大学ホールで「国際山岳年」総括フォーラムとして、「山やまの未来」（国連大学と共催）を、4月19、20日には東京・日大文理学部百周年記念会館で、クローズング・シンポジウム「我らみな、山の民」を開き、2001年11月の発足以来、一年半の活動のしめくりとした。その成果は2004年4月、『我ら皆、山の民』として一冊の本にまとめられた。

国際山岳年中、各県で独自に「山を考える集い」が開かれ、「山の日」は、リーフレット、ポスターなどのかたちでアピールされた。

国際山の日(International Mountain Day)

国連は、国際山岳年を記念して、2003年以降毎年12月11日を「国際山の日」"International Mountain Day"とすることを決め、世界各国に通知した。この日にあわせて世界各国で山に関する催しを開くことが期待されているが、日本では季節感の違いもあってあまり広がっていない。国際的な連帯は不可欠であり、どう進めるか今後の課題であろう。

(江本嘉伸)